

授業外学習時間の測定と課題

中島 ゆり（長崎大学）

本稿は、生活時間記録法による授業外学習時間の測定の試みから、大学生の授業外学習時間の実態と学習時間の具体的な内容について検討する。授業外学習時間は選択肢選択による測定と生活時間記録法による測定とでは結果が異なり、生活時間記録法による測定の方が平均が長く出ることが分かった。結果として、授業に関連しない学習時間を含めると北米の NSSE 調査の結果とほぼ同じであった。つぎに、授業に関連しない学習時間について検討したところ、学生は就職活動やコンピテンスの伸長のための学習をしていること、学習と捉えるか否かは人によって異なることから、授業に関連しない学習を学習時間の指標とすることは難しいことを指摘した。最後に、授業に関連する学習時間は北米の平均である 15 時間程度を目指すことを提案するとともに、北米の社会システムと異なる日本社会においては授業に関連しない学習時間も必要であり、必要な授業外学習時間の内容の再考が求められることを指摘した。

キーワード：授業外学習時間／生活時間記録法／内部質保証／教学 IR

1. はじめに

日本の大学生の授業外学習時間が短いという指摘は以前からなされているが、これは大学生個人の学びの不十分さととどまらず、日本の大学教育の質保証上の問題として捉えられている。近年、文部科学省や大学改革支援・学位授与機構等は大学に対し、授業外学習時間を確保し、それを把握することを求めている。たとえば、教育再生実行会議(2013)は第3次提言「これからの大学教育等の在り方について」の中で、全学的教学マネジメントの改善として「授業の事前準備や事後展開を含めた学生の学修時間の確保・増加」を掲げている。また、大学改革支援・学位授与機構が2017年に公表した「教育の内部質保証に関するガイドライン」の中では、「単位の実質化への配慮がなされているか。学生の主体的な学修を促し、十分かつ必要な学修時間を確保するような工夫がなされているか(学生が準備学修・復習等、主体的な学修を行えるような授業外学修時間¹の確保(以下省略))」(p.31)が挙げられており、「根拠となる資料・データ等例」に「学生の学修時間に関する調査結果」(p.31)とある。同様に、中央審議会大学分科会構想部会は2018年6月に「今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ」を発表し、その中で大学生の授業外学修時間が非常に短いこと、全学的な内部質保証を促進するために教学マネジメントの確立を一層進める必

¹ 大学設置基準において、大学での学びは「学修」と記載されている。本稿では、大学在学中の自主的な学びも視野に入れるため、引用以外においては、より広い意味の「学習」を用いる。

要があることを問題意識として述べ、確立すべき教学マネジメント指針に盛り込む事項の例の一つに「学修時間の確保と把握」を挙げている。

このように各大学は「学修時間の確保と把握」が求められているが、これまでさまざまな調査で測定されてきた大学の週平均学習時間は専攻によって多少差はあるが、大学の種別や偏差値によってあまり違いがないことが分かっている（国立教育政策研究所 2016、両角 2009、中島 2017）。これらの調査における学習時間の測定は、選択肢選択によって典型的な1週間の授業外学習時間を回顧的に尋ねるものであり、調査結果から学習時間の平均値を算出する場合には、カテゴリーの中間値をとって計算する方法が取られることが普通である。たとえば、大学 IR コンソーシアム²が実施している「学生調査」では「授業や実験に出る」、「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」、「授業時間外に、授業に関連しない勉強をする」、「オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」、「部活動や同好会に参加する」、「大学外でアルバイトや仕事をする」、「読書をする（マンガ・雑誌を除く）」、「個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）」についての「週あたりの活動時間」を「全然ない」、「1時間未満」、「1-2時間」、「3-5時間」、「6-10時間」、「11-15時間」、「16-20時間」、「20時間以上」という選択肢によって尋ねている。

このような選択肢選択での聞き方は、授業外学習時間の大学平均や学部平均を大雑把に把握し、他大学や諸外国と比較しようとする目的においては有効であるが、大学の質保証のアカウントビリティのためにより正確な学習時間を公表しようとしたり、短期間における学習時間の伸長状況を把握したりする目的³においては難があると言わざるを得ない。なぜなら、「典型的な1週間」という曖昧な1週間について、学生が回顧的にどの程度、正確に学習時間を回答するか疑問であり、また、授業時間の伸びについては、それが短期間であるほど選択肢としては同じカテゴリーになる可能性が高く、正確な伸びを測定できないと考えられるからである。たとえば、週に3時間学習していた学生が5時間勉強するようになっても「3-5時間」の選択肢カテゴリーでは同じになってしまうということである。かといって「典型的な1週間」という曖昧な週に対し、自由回答で数値を答えてもらうことも難しい。

長崎大学は2014年（平成26年）に「大学教育再生加速プログラム（AP）」に採択されたことから、学生の学習時間についてより正確に把握し、短期間の伸長状況を測定する必要に迫られたため、選択肢選択以外の方法で授業外学習時間を測定する試みを行ってきた。本稿では、この取り組みについて紹介し、そこから見えてきた授業外学習時間の測定における課題について検討する。

2. 日米の授業外学習時間の相違

日本の学生の授業外学習時間が短いと言うとき、北米の調査結果と比較されることが多い。谷村・

² 大学 IR コンソーシアムは2012年に同志社大学、関西学院大学、甲南大学、北海道大学の4大学を中心とした共通の学生調査を行うことでベンチマークを目指す全国ネットワークである（大学 IR コンソーシアム 2012）。長崎大学は平成25年度から平成30年度まで加盟し、1年に一度、1年生と3年生に対する悉皆調査を実施した。

³ 文部科学省が2014年（平成26年）度から実施している「大学教育再生加速プログラム（AP）」の「テーマⅡ 学修成果の可視化」では、申請校に対し「補助期間内において学生の授業外学習時間が増加するものであるか」を求め、1週間あたり（時間）の指標とその測定方法を記載することを要求している。

金子 (2009) によれば、日本の1年生(文系)の授業外学修時間は8.9時間(授業関連学修+自主的学修時間)であるのに対し、アメリカの学生は13.3時間である(授業関連学修時間)。より近年の2019年の北米の調査(National Survey of Student Engagement (NSSE))によれば、“About how many hours do you spend in a typical 7-day week doing the following?”という質問における“Preparing for class (studying, reading, writing, doing homework or lab work, analyzing data, rehearsing, and other academic activities)”の平均は1年生(first-year students)で週14.43時間、4年生(Seniors)で14.96時間である。ただし、この学習時間は大学の種別によって多少異なっている。たとえば研究活動をかなり行っているような博士号授与大学では1年生で15.11時間、4年生で15.04時間、学士号授与大学(多様な専門)では1年生で13.08時間、4年生で14.55時間である。選択肢カテゴリーで見ると(図1)、1年生も4年生も「6-10時間」、「11-15時間」、「16-20時間」の比率が高く、4年生になると「30時間以上」の比率が少し上がる。

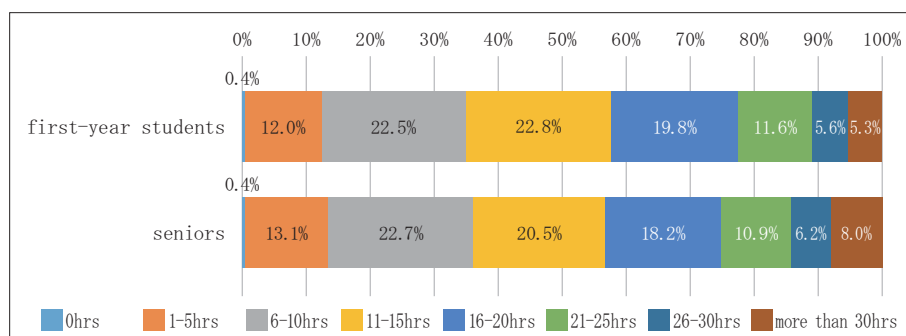


図1 北米の典型的な1週間の授業準備時間(2019)

出所 National Survey of Student Engagement (2019) より筆者作成

北米の学生はどの程度、授業外学習を行う必要があると考えられているだろうか。アメリカの大学では自学のウェブサイト上で1単位(1 credit hour)に対し、どれくらい勉強する必要があるのかを示すことがある。たとえば、ミシガン大学フリント校のウェブサイトを見ると(University of Michigan-Flint 2019)、“Surviving College”として、1 credit hourの授業では週1時間の授業のほか、およそ2~3時間の授業外学習だと明記されている。本サイトによれば、フルタイムの学生は1つの semester に12~18 credit hours(4~6コース)を履修することが多く、もし12 credit hoursを履修していれば24~36時間の授業外学習時間が必要だという例が挙げられている。そして、これを踏まえ、何単位履修すべきかは、学生自身が他にどのような活動をしているか、学習スキル、時間管理のスキル、自己規律などのさまざまな要因を考慮して決めるように記されている。

これに対し、日本では授業外学習時間は単位の実質化のため、大学設置基準で定義されている。それによれば、1単位を取るためには授業時間を含めて45時間の学修が必要とされている。これはすなわちアメリカと同様に、1単位を取るには週1時間の授業とその倍の学習時間を15週にわたって行うという計算になる。日本では多くの授業が2単位で成り立っており、週に90分(みなし2時間)の授業を15回行うことから、週に週4時間の授業外学習が必要となる。もし学生がある semester に10コマ(20単位)を取ると、週40時間(毎日約6時間程度)の授業外学習が必要となる。

しかし、実際には学生はそれほど長い時間の授業外学習は行っていない。2014年に実施された国立教育政策研究所の「大学生の学習実態に関する調査研究」によれば、1、2年生の授業の予習・復習等の平均時間はいずれも5時間程度、大学の授業とは関連のない学習の平均時間は1、2年生で2.5時間前後、3、4年生で4時間強である(国立教育政策研究所 2016)。また、大学IRコンソーシアムが実施した2018年度の学生調査によれば、1週間あたりの時間を聞く問いで「授業時間外に授業課題や準備学習、復習をする」割合が高いのは1年生で「1～2時間」26.1%、「3～5時間」29.5%であり、上級生で「1～2時間」26.7%、「3～5時間」23.6%であった。また、「授業時間外に授業に関連しない勉強をする」割合が高いのは、1年生で「全然ない」33.4%、「1時間未満」29.9%、上級生で「全然ない」26.3%、「1時間未満」26.5%、「1～2時間」21.0%であった(大学IRコンソーシアム 2019)。日本の学生の授業外学習時間は北米のNSSE調査と比較しても短い、大学設置基準と比べると全く達成されていない状況である。

ここで、もう一つ確認したいのは「授業に関連しない学習」についての日米間の相違である。先に紹介した国立教育政策研究所の調査でも大学IRコンソーシアムの調査でも「授業に関連しない学習」の時間を尋ねているが、実はこの項目は北米のNSSE調査にはない。授業準備(Preparing for class)以外の項目として挙げられているのは、課外活動(co-curricular activities)、学内での仕事、学外での仕事、ボランティア、遊び・社交、ケア労働、通学時間である。このことから、北米の大学では学期中、授業に関連しない学習をすることが想定されていないことが分かる。それでは、日本の学生は授業外の学習として何を実際、行っているのだろうか。

3. 生活時間記録法を用いた授業外学習時間測定の試み

長崎大学では、学生の授業外学習時間を正確に測定するため、2015年度のパイロット調査を経て、2016～2019年度の4ヶ年にわたり、生活時間記録法を用いて授業外学習時間の測定を試みた⁴。この調査では、12月の2～3週目の月曜日から日曜日まで毎日ウェブ上のアンケートサイトに、その日の「学習に関する活動の時刻、学習内容、学習カテゴリー(A、B、C)、時間(分)」について報告してもらい、できる限り正確な時間を測定することを試みた⁵。また、学習時間だけでなく、学習の内容を具体的に把握することも目的とした。

(1) 選択肢選択と生活時間記録の間の学習時間の相違

2015年度のパイロット調査は、選択肢選択で選んだ学習時間と、同時期に実施する生活時間記

⁴ 長崎大学では生活時間記録法による学習時間の測定を2015年度のパイロット調査を経て、2016年度から2019年度の間、毎年実施してきたが、一定の傾向を把握できたため、2020年度以降は数年に1度の実施に切り替える。選択肢選択による学習時間の把握は引き続き毎年行うが、授業時間はコマ数で聞き、授業外学習時間を含む活動時間については週あたりの時間のほか、日あたりの時間も選択肢の中に表示することでよりイメージしやすいよう工夫している。

⁵ ただし、パイロット調査ではウェブ上のアンケートサイトは用いず、紙の調査票を事前に配付し、毎日、紙に記録してもらい、最後に回収するという方法をとった。詳細は中島(2017)を参考のこと。このときの学生からの意見をもとに、その後の本調査では紙媒体の調査票ではなく、ウェブ上のアンケートサイトに記録してもらうことにした。

録法による学習時間とを比較する目的で行った。選択肢選択では「典型的な1週間」を想定してもらおうが、多くの者は調査時点のセメスターを想定する者が多いだろうと予想し、長崎大学が当時、加盟していた大学 IR コンソーシアム学生調査の対象者43人(1年生41人、3年生2人)⁶に対し、ほぼ同時期に生活時間調査を実施した。

生活時間記録法による調査では、対象者の学生に毎日の学習内容とその時間、学習カテゴリーを記録してもらった。学習カテゴリーは3つとし、Aは「大学の授業」、Bは「授業に関連する学習」、Cは「授業に直接関係しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動」とした。Cについては図2のように具体例を例示し、ここでは学習の意味を広く捉えてもらった。調査後、Cについてはアフターコーディングを行い、公務員や教員採用試験、就職試験対策、TOEICのための学習、英語のリスニングなどの一般的なイメージの学習(C1)と、それ以外の、たとえば、コミュニケーション能力を高めるために接客のアルバイトをする、教員になる上でよりよい教え方を学ぶために塾講師をする、といった一般的な学習のイメージに合わないものに分類した。

- ※Cの「授業に直接関係しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動」とは？
たとえば・・・
- 電車の中で英語のリスニングをする
 - ご飯を食べながら単語帳で単語を覚える
 - 就職試験対策の勉強をする
 - 外国語を身につけることを目的として YouTube を見たり洋楽を聞いたりする
 - 歴史を学ぶために本を読む
 - 社会情勢を学ぶために新聞を読む
 - コミュニケーション能力を高めるために接客のアルバイトをする
 - 英語を勉強するために英語サークルの活動をする etc.
- つまり、「何かを学ぶこと」を主な目的としておこなっている活動全般のことです。

図2 「授業に関連しない学習」の例

学生調査の選択肢は「1時間未満」、「1～2時間」、「3～5時間」、「6～10時間」、「11～15時間」、「16～20時間」、「20時間以上」であったが、これと生活時間記録法による特定の1週間の学習時間を算出した結果を比べたところ、授業時間、授業に関連する学習時間、授業には関連しない学習時間のいずれにおいても相違が見られた。中島(2017)の分析結果から抜粋すると、表1、表2のとおり、同じセメスターに実施された調査であるにも関わらず、選択肢選択での「A. 授業や実験に出る」の平均値は1,007分(90分授業11.2コマ換算)、生活時間記録法での「A. 大学の授業」の平均値は1,189分(90分授業13.2コマ換算)と、授業コマ数にして平均では2コマの相違があり、生活時間記録法で測定した方がコマ数が多かった。授業に関連する学習時間については、選択肢での測定による「B. 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」時間の平均値は267分だったが、生活時間記録による「B. 授業に関連する学習」の平均値は587分と異なっており、授業時間と同様、生活時間記録による測定の方が時間が長くなっていた。授業には関連しない学習について見ると、選択肢での測定による「C. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする」時間の平

⁶ パイロット調査は、長崎大学のある授業を履修していた学生に協力してもらい、両調査の回答結果を比較することに同意した学生の結果のみを分析した。詳細は中島(2017)を参照のこと。

均値は 80 分だったが、生活時間記録による「C. 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動」による平均値は 493 分と、平均値で 6.9 時間の差があった。ただし、ここには、多くの者がイメージするであろう机上の学習以外の「学習」が含まれているため、狭義の学習に限定して計算したところ平均値は 85 分であり、大きな相違は見られなくなった。

以上のように、質問紙調査と生活時間記録での平均値を比較すると、授業時間と授業に関連する学習時間は、生活時間記録の方が長い傾向にあった。

表 1 選択肢によって測定した学習時間(分)

	A 授業や実験に出る	B 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする	C 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする
平均値	1007	267	80
中央値	1080	240	30
最大値	1200	780	480
最小値	30	0	0

注) 「全然ない」 = 0 分、「1 時間未満」 = 30 分、「1～2 時間」 = 90 分、「3～5 時間」 = 240 分、「6～10 時間」 = 480 分、「11～15 時間」 = 780 分、「16～20 時間」 = 1080 分、「20 時間以上」 = 1200 分として計算。

出所 中島 (2017, p.20)

表 2 生活時間記録法によって測定した学習時間(分)

	A 大学の授業	B 授業に関連する学習	C 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動	C1 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動 (一般的なイメージの学習に限る)
平均値	1189	587	493	85
中央値	1170	560	300	0
最大値	2070	2130	2045	910
最小値	180	0	0	0

出所 中島 (2017, p.20) より著者が加筆修正

つぎに選択肢選択で測定した場合と生活時間記録法で測定した場合とで、どの程度回答カテゴリーに相違があるかを検討したところ (中島 2017)、相違のなかったケースは「大学の授業」で比較的高めだが、それでも半数の回答に相違があるという結果になった。そして、「授業に関連する学習」と「授業に関連しない学習」では相違が見られなかったのはそれぞれ 2 割程度、一般的なイメージの「授業に関連しない学習」では 4 割であった。

表 3 生活時間記録と選択肢選択との相違

	A 大学の授業	B 授業に関連する学習	C 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動	C1 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動 (一般的なイメージの学習に限る)
ずれのなかった回答数 (%)	21(48.8%)	10 (23.3%)	10 (23.3%)	17 (39.5%)

出所 中島 (2017, p.21) より著者が加筆修正、一部を抜粋

以上の分析から、選択肢選択による測定と生活時間記録法による測定との間に相違が生じるこ

とが確認された。選択肢選択における「典型的な1週間」が生活時間記録法による調査実施期間以外の1週間であった可能性も当然あるが、「典型的な1週間」という曖昧な1週間について、回顧的に回答する場合、回答者が自身の学習時間を正確に算出できず、イメージで回答してしまうという可能性も考える必要がある(中島 2017)。

(2) 生活調査時間記録法による調査結果と課題

以上のパイロット調査を経て、長崎大学大学教育イノベーションセンターでは2016年度から2019年度の4ヶ年にわたり、これまでの選択肢選択による学習時間の測定も従来通り実施しつつ、生活調査記録法による測定も始めた。生活調査記録法は1週間毎日、学生に調査協力をしてもらう必要があるため、インセンティブとして、7日間の協力に対し1,000円、5～6日間の協力には500円のQuoカードを進呈している。4日以下の協力についてはインセンティブを与えず、できるだけ7日間毎日、回答してもらうよう促した。調査時期はパイロット調査と同時期の12月上旬とした。対象者数は毎年度、約400人、回答数は約100人、回答率は4割弱である⁷。

調査対象者は2016年度には1、2年生、2017～2019年度には1年生と3年生を対象とし、学部・学科、性別、GPA、1、2年生については履修している教養教育(全学モジュール)⁸のテーマを考慮した上でランダムに抽出した。モジュールのテーマを考慮したのは、テーマごとに授業外学習時間が異なる可能性を想定したためである。GPAは3.0以上を高GPA、2.5以上3.0未満を中GPA、2.5未満を低GPAと3カテゴリーに分類した。

表4で2018年度の結果を確認すると、授業時間(A)は平均14.1時間、授業に関連する学習時間(B)は8.6時間、授業に関連しない学習時間(C)は5.0時間、そのうち一般的なイメージの授業に関連しない学習時間(C1)は2.7時間であった。ゆえにBとC1を足した授業外学習時間は11.3時間となった。学年別に見ると、授業時間は1年生で長く、授業に関連する学習時間、授業に関連しない学習時間はいずれも3年生で長くなっていた。GPA別に見ると、授業時間、授業に関連する学習時間はGPAが高い方が長い、授業に関連しない学習時間は調査年度でばらつきも大きく、必ずしもGPAが高い方が長いとは言えなかった。

この結果は長崎大学で実施した大学IRコンソーシアム学生調査で実施した選択肢選択で行った授業外学習時間よりも長い学習時間である。たとえば2015年度の悉皆調査の結果を見ると、「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」時間は4.6時間、「授業時間外に、授業に関連しない勉強をする」時間は1.5時間であったが、生活時間記録法による調査結果は授業に関連する学習は4時間、一般的なイメージの授業に関連しない学習時間は1.2時間長かった。これはパイロット調査と同様の結果であった。

しかし、この生活時間調査法の協力者数は100人程度と少ないため、調査年度によって結果が大きく異なってしまう可能性がある。そこで、2017年度および2018年度の調査結果を比較したとこ

⁷ たとえば2018年度の調査対象者数は393人、有効回答者数は152人、回答率は38.7%であった。

⁸ 長崎大学の教養教育では学生がテーマを選び、テーマ内の一連の授業を履修するという仕組みを設けている。

ろ(表4)、授業時間、授業に関連する学習時間、一般的なイメージの授業に関連しない学習時間は両年度でさほど差がなく、回答者は100人程度であるが、ある程度の安定した結果が得られていることが確認できた。授業に関連する学習時間(B) + 授業に直接関連しない一般的なイメージの学習時間(C1)の結果も2017年に11.6時間、2018年には11.3時間であった。他方、広く捉えた授業に関連しない学習時間については両年度で3.5時間の差があった。

表4 2017年度および2018年度の学年別、GPA別 学習時間(週平均時間)

		授業時間 (A)	授業に関連する 学習時間(B)	授業に関連し ない学習時間 (C)	授業に関連しない学習 時間(一般的なイメ ージのものに限る)(C1)	授業外学習時間 合計 (B+C)	授業外学習時間 (一般的なイメージのもの に限る)(B+C1)
全体	2017年度調査	12.7	8.0	8.5	3.6	16.5	11.6
	2018年度調査	14.1	8.6	5.0	2.7	13.5	11.3
	差分(絶対値)	1.4	0.5	3.5	0.9	3.0	0.3
1年生	2017年度調査	14.8	5.1	5.2	1.4	10.2	6.4
	2018年度調査	14.6	7.6	2.9	1.2	10.6	8.8
	差分(絶対値)	0.1	2.5	2.2	0.2	0.3	2.4
3年生	2017年度調査	10.9	11.1	12.2	6.1	23.3	17.1
	2018年度調査	13.6	9.6	7.2	4.4	16.8	14.0
	差分(絶対値)	2.7	1.5	5.0	1.7	6.4	3.1
GPA高	2017年度調査	14.5	9.3	9.0	3.8	18.3	13.1
	2018年度調査	15.5	10.7	7.1	4.1	17.9	14.8
	差分(絶対値)	0.9	1.4	1.9	0.3	0.5	1.7
GPA中	2017年度調査	11.3	6.8	7.8	3.0	14.6	9.8
	2018年度調査	13.4	7.5	3.2	1.2	10.7	8.7
	差分(絶対値)	2.1	0.6	4.6	1.8	3.9	1.2
GPA低	2017年度調査	11.7	7.4	9.3	4.6	16.6	12.0
	2018年度調査	12.2	5.3	2.7	1.9	8.0	7.2
	差分(絶対値)	0.5	2.1	6.5	2.7	8.6	4.8

表4を可視化したものが図3であるが、これを見ると、授業時間、授業に関連する学習時間、一般的なイメージの授業に関連しない学習時間の差は両調査年度で比較的小さく、多くとも3時間弱である。しかしながら、広く捉えた授業に関連しない学習時間については、とくにGPAが低い者と3年生で両調査年度の差が大きい。広く捉えた授業に関連しない学習については、何を学習と思うかがその年度の対象者のイメージに大きく左右されるため、100人程度の対象者では結果が安定しないということが分かった。

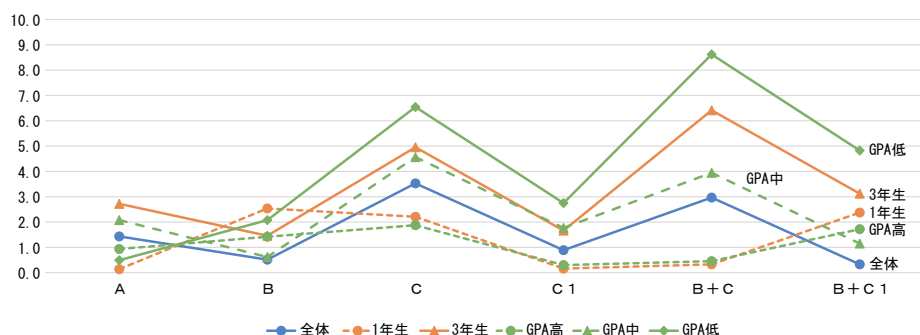


図3 調査年度による平均学習時間の差(学年別、GPA別)

(3) 広く捉えた授業に関連しない学習の内容

つぎに、一般的なイメージに限らない、広く捉えた授業に関連しない学習としてどのようなものが挙げられたらどうか。2018年度調査の結果を図4に示した。

アルバイト（塾講師・家庭教師、コミュニケーション力を付ける）、アルバイトの準備、就職活動・研究室見学・インターン、自動車学校、手話、読書、ニュースを見る、新聞を読む、洋楽や韓国語の歌を聴く、サークル・部活・ボランティア・稽古等、趣味の勉強、釣り⁹、美術館、料理、ブログへの書き込み、話し合い、教養

図4 授業に関連しない一般的なイメージではない学習（2018年度調査より）

「TOEICの勉強をする」、「専門書を読む」、「リスニングをする」といった一般的なイメージの自主学習に比べ、図4で挙げたような「小説を読む」、「アルバイト」、「就職活動」、「洋楽を聴く」、「サークル」といったものは、それを学習として捉えるか否かは人によって異なる。たとえば、「就職活動」を学習時間として挙げる学生もいれば、「就職活動に行っていたのでこの日は何も学習していない」と回答してくる学生もいる。近年、学士力や社会人基礎力といったコンピテンスの育成が求められており（松下 2010）、実際、授業外の自主学習として、このような能力をアルバイトやサークル活動で意識的に育成しようとしている学生もいる。しかしながら、これらの活動を学習と捉えるか否かは主観的であり、また、学習だと捉えないからといってその活動からの学びがないわけではない。

先述したとおり、一般的なイメージの学習かどうかは調査者が分類した恣意的なものであるため、「読書」や「手話」、「新聞を読む」といったような項目を、回答者は一般的なイメージの学習として回答している可能性もある。このように学生が何を学習だと考えているかを詳細に見ると、授業に関連しない学習は人によってそのイメージが異なることが明らかなため、これが学習であるという学習内容の例を詳細に調査者が定義して示さない限り、学習の指標としては非常に曖昧である。上記のように近年のコンピテンスをめぐる状況を考えれば、本調査のように「アルバイト」や「サークル」を記載してもよいと調査者が示さなくとも自らの考えで授業外学習時間の中に含める者もいるかもしれない。それは選択肢選択における測定でも同様である。つまり、学習時間の測定における学習の内容は回答者の考えに依存するため、測定する学習時間それ自体も非常に恣意的なものであると言える。

本節では生活時間記録法を用いた学習時間の結果と、授業に関連しない学習時間の内容について確認した。図4に示したとおり、一般的なイメージではない授業に関連しない学習時間を含めると実は北米の授業外学習時間の平均と大差ない（2017年度 16.5時間、2018年度 13.5時間）。北米の調査項目に授業に関連しない学習時間を含めなくて済むのは、大学在学中にそれらが必要とされていないからであり、対して、日本の学生はコンピテンスの伸長や就職活動など、在学中に授業に関連しない学習が求められており、授業に関連する学習時間が短くなってしまっているとも言える。

3. 平均的な学生の一週間の学習行動の詳細

2節で生活時間記録法を用いて測定した場合、日本の大学生の授業外学習時間は北米と大差ないことを見た¹⁰。それでは日本の大学生はこれ以上、授業に関連する学習をしなくてよいと言えるのだら

⁹ 「釣り」は一般的には学習とは言えないが、本回答者は水産学部の所属であるため必要な学習として理解可能である。

¹⁰ ただし、北米の学生の学習時間を同様の生活時間記録法によって測定した場合、現状の選択肢選択での測定結果よりも長くなる可能性は十分ある。

うか。日本の学生の学習時間は短いと指摘される一方で、現代の学生は忙しいという声も聞かれる。これ以上、学習時間を増やすことは可能だろうか。本節では、平均的な授業外学習時間の学生の1週間の学習行動の詳細を可視化し(図5)、学生の時間の使い方について検討する。平均的な学習時間の学生の1週間と比較するため、学習時間の長い学生の1週間の学習行動の一部も図6に示した。

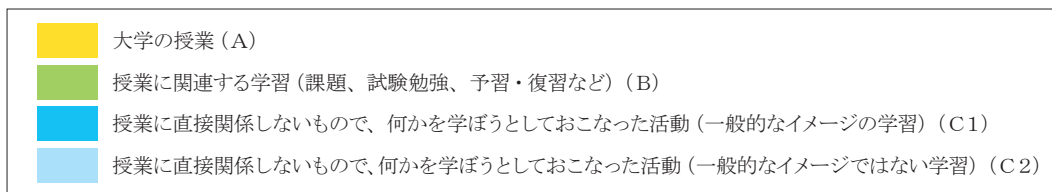
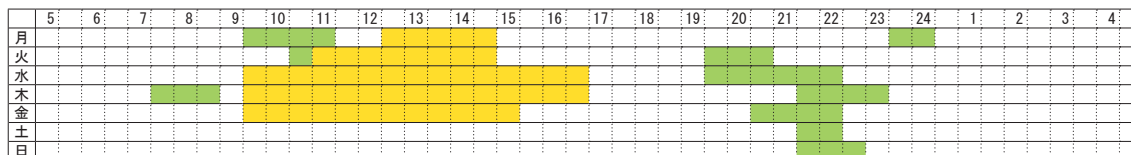


図5 凡例

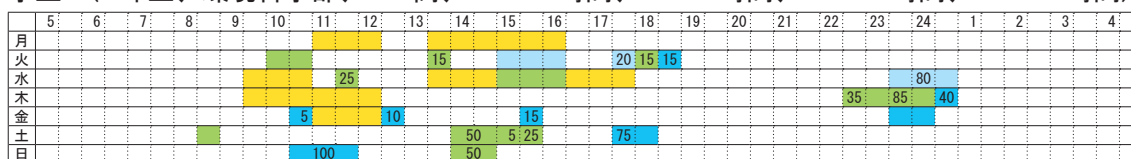
平均的な学習時間の場合、学生Iと学生Kのように、授業時間が長めで、土日を含めた一日数時間、授業に関連する学習を行うというケースがある。学生Iは授業に関連する学習時間のみで15時間であり、NSSE調査による北米の学生の平均と同じ程度である。授業に関連する学習以外の学習はしていないため、授業外学習時間以外にも余裕があり、他の活動を行う時間も十分取れるように見える。

学生Jは一回一回の学習時間はさほど長くないが、3年生ということもあり、授業に関連しない学習(主にSPI対策(C1)と業界研究(C2))を空き時間を見つけて行っている。学生Lは1年生であり、授業時間も授業に関連する学習時間も平均的で、授業に関連しない学習(ニュースを見たり投資の勉強をしたり)を少ししているような学生である。

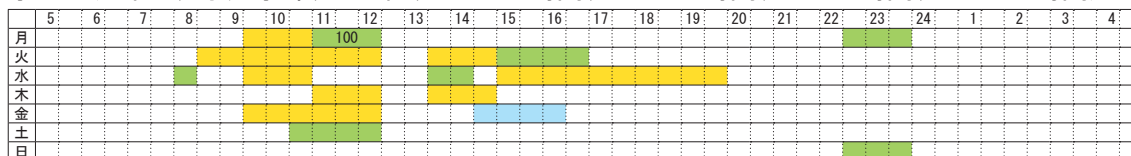
学生I(3年生、工学部、GPA中、A:17.8時間、B:15.0時間、C1:0時間、C2:0時間)



学生J(3年生、環境科学部、GPA高、A:13.5時間、B:8.5時間、C1:5.3時間、C2:3.2時間)



学生K(1年生、水産学部、GPA低、A:18.0時間、B:10.2時間、C1:0時間、C2:2.0時間)



学生L(3年生、経済学部、GPA高、A:16.5時間、B:9.2時間、C1:1.9時間、C2:0.7時間)

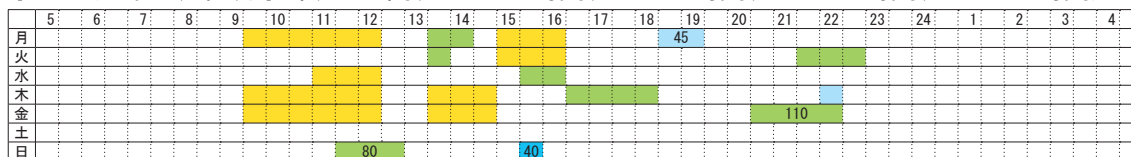
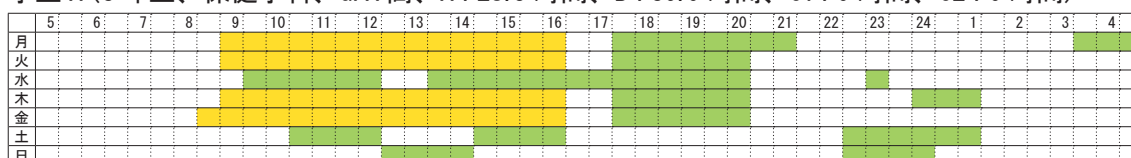


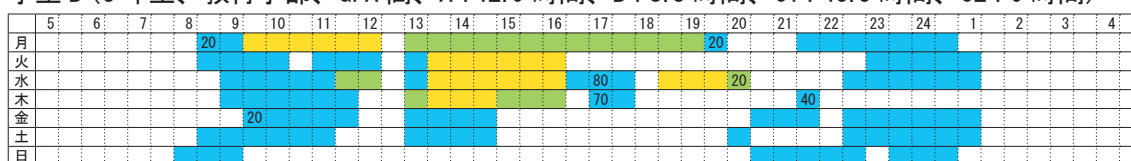
図6 平均的な学習時間の学生の1週間の学習行動例

平均的な授業外学習時間の学生と比較するため、学習時間の長い学生について中島 (2019) から抜粋し、授業に関連する学習時間が長いケース (学生 A)、授業に関連しない学習時間が長いケース (学生 B)、一般的なイメージではない授業に関連しない学習時間も長いケース (学生 E) を確認する。学生 A は保健学科の 3 年生で、大学の授業が週 28.5 時間、授業に関連する学習時間が週 39 時間と長い。これは看護学実習により授業外でも実習に関する学習と実習記録の作成をする必要があるからである。学生 B は教育学部の 3 年生で、午前から夜遅くまで空いた時間に教員採用試験の勉強を長時間しているほか、登下校中に英語のリスニングも行っている。学生 E は授業に関連する学習時間は平均的だが、TOEIC の勉強時間や読書時間が長く、また、家庭教師として勉強指導についての自主学習も行っていることで総学習時間が長くなっている。

学生 A (3 年生、保健学科、GPA 高、A : 28.5 時間、B : 39.0 時間、C1 : 0 時間、C2 : 0 時間)



学生 B (3 年生、教育学部、GPA 高、A : 12.0 時間、B : 8.3 時間、C1 : 45.5 時間、C2 : 0 時間)



学生 E (1 年生、経済学部、GPA 高、A : 21.0 時間、B : 9.5 時間、C1 : 5.0 時間、C2 : 12.0 時間)

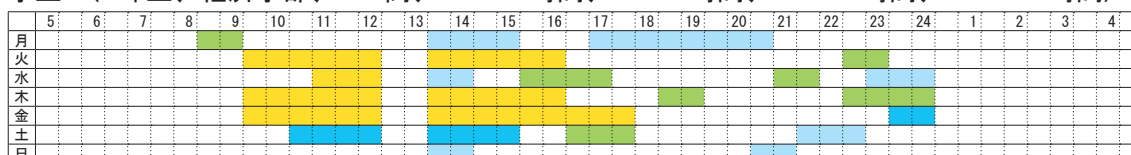


図 7 学習時間の長い学生の 1 週間の学習行動例

出所 中島 (2019、p. 28)

このように、学習時間の長い学生の 1 週間の学習行動と比べると、平均的な学習時間の学生の 1 週間はかなり余裕がある状況に見える。図 2 で示したとおり、本調査では一般的な学習のイメージに限定せず、学生にあえて『何かを学ぶこと』を主な目的としておこなっている活動全般について回答するよう促したが、それでも平均的な学習時間の学生の 1 週間には余裕があるように見えるということは、平均的な学習時間の学生において、何らかの学習時間の増加が直ちに交友や趣味、アルバイトやサークルを通じた学習時間を不十分にさせるということはないということである。ただし、検討すべきはその学習の内容である。学習時間の長い学生 B のように、就職や教員採用試験を控えている学生が、授業に関連する学習よりも授業に関連しない学習時間を長く取るのは、かれらの責任ではない。

4. 結語

本調査研究では、生活時間記録法による授業外学習時間のより正確な測定と授業に関連しない学習の具体的な内容を明らかにすることを試みた。得られた知見は以下のとおりである。

第1に、授業外学習時間は典型的な1週間について選択肢で尋ねる測定方法よりも、具体的な1週間について毎日回答させて学習時間を合計すると長くなるということが分かった。とくに授業に関連する学習は平均で3時間も長くなることが分かった。選択肢選択で測定した平均5時間という回答はおそらく平日毎日1時間程度というイメージから来ているものと推測されるが、実際は空き時間などの短い時間にも学習しており、それらを足し合わせると学生自身のイメージよりも長くなるようであった。

第2に、授業に関連しない学習時間を含むと、北米の調査結果である平均15時間の学習時間とさほど差がないということが確認できた。日本では、北米の大学では必要とされない授業に関連しない学習を在学中に求められている。日本で大学在学中に就職活動やコンピテンスの伸長を求められている限り、それに必要な学習時間を否定することはできない。

第3に、しかしながら、授業に関連しない学習時間を測定することは難しい。なぜなら、何を学習と捉えるかは回答者によって異なり、恣意的であるからである。調査者が詳細な例を示さない限り、安定した学習の指標としては利用できない。

第4に、日本の平均的な学習時間の学生の1週間には余裕があり、授業外学習時間をもう少し増やしても他の活動が不十分になるとは言えないことが確認できた。日本の学生の学習時間が短いという指摘がある一方で、現代の大学生は忙しく、授業課題を増やしてこれ以上、授業外学習時間を長くすると学生の生活に支障が出るという危惧も聞かれる。しかし、本分析で平均的な学習時間の学生と学習時間の長い学生の1週間を比べたところ、平均的な学習時間の学生の1週間には時間的な余裕が見られ、さらに、それらの余裕の時間を学生自身が学習の時間とは捉えていないことが明らかとなった。上で挙げたように、授業に関連しない学習時間を含めると北米の授業外学習時間と変わらないが、授業に関連する学習時間だけを取り出すと、北米の半分程度である。学生Iのケースのように授業に関連する学習時間を北米の平均である15時間程度まで伸ばしても学生のそれ以外の活動に大きな支障は出ないと思われる。

しかし、大学設置基準が定めるような1単位につき2時間程度の授業に関連する学習時間を確保することは非常に難しい。学生は、2単位の授業を週に平均およそ10コマ履修しているが、これは大学設置基準によれば週40時間の授業外学習時間が必要になることを意味している。

それでは大学がCAP制を導入して履修単位の上限を設定し、授業外学習時間を確保するようになればよいだろうか。この問題点は、より資格を得たい学生等の学習を制限してしまう可能性があるということである。かといって、アメリカの大学のウェブサイトには書かれているように、それぞれの学生の活動状況や能力に応じて履修科目数を調整するよう求めることも日本の大学の現状では難しい。なぜなら、大学は留年率を減らして四年ないし六年の標準卒業年限で卒業させることを要求されており、また、標準卒業年限で卒業することに価値があると思われているからである。このため、自分に合った形で履修するといった調整をすることを学生に進めることはしない。授業料の

支払いも単位ベースではなく年ベースであることが多いため、学生は大学に長く在学することを避け、履修できるときにできるだけ多く履修しようとするが、これも理にかなっている。

繰り返しになるが、日本の学生は大学在学中の就職活動やコンピテンスの伸長が求められ、さらに企業からは大学で何を学んだかよりもサークルやアルバイト、ボランティアなど、どのような活動を行ってきたか、その活動を通してどのようなコンピテンスを身につけた（と推察できる）かが問われるという現状がある。これは北米の大学および社会のシステムと大きく異なる点であり、学生の授業外学習時間を検討する際にはこの点を考慮する必要がある。たとえば、一つのアイデアとして、授業に関連する学習は北米の平均である週 15 時間程度（毎日およそ 2 時間程度）を目指し、それ以外は日本の社会で必要なそれ以外の学習を行うことも可能として、アメリカの大学のようにウェブサイト等に明記し、学生に認識させる。

そうでなく、あくまで単位の 2 倍にあたる授業に関連する学習時間が必要だということであれば、大学の標準卒業年限を外す、学生の活動状況や能力に合わせた入学から卒業までの個々人のスケジュールを自由に決められるようにし、授業料も単位ベースにする、学校から社会への移行の仕組みとして新卒一括採用も廃止するなど、大学と社会の大幅な仕組みの転換が必要となろう。

引用文献

- 大学 IR コンソーシアム 2012、「大学 IR コンソーシアムとは」(<http://www.irnw.jp/concept.html>) 2019 年 12 月 20 日最終閲覧。
- 大学 IR コンソーシアム IR システム運用部会 2019、『『一年生調査 2018 年』『上級生調査 2018 年』基礎集計結果』([http://www.irnw.jp/pdf/2018/基礎集計2018\(HP\).pdf](http://www.irnw.jp/pdf/2018/基礎集計2018(HP).pdf)) 2019 年 12 月 20 日最終閲覧。
- 大学改革支援・学位授与機構 2017、「教育の内部質保証に関するガイドライン」。
- 河井亨 2015、「正課外教育における学生の学びと成長」『大学時報』34-41 頁。
- 教育再生実行会議 2013、「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/teigen.html>) 2019 年 12 月 20 日最終閲覧。
- 国立教育政策研究所 2016、「大学の学習実態に関する調査研究について（概要）」(https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/seika_digest_h27a.html) 2019 年 12 月 20 日最終閲覧。
- 松下佳代編著 2010、『<新しい能力>は教育を変えるか——学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房。
- 文部科学省 2000、「大学における学生生活の充実方策について（報告）——学生の立場に立った大学づくりを目指して」。
- 文部科学省 2008、「学士課程教育の構築について（答申）」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm) 2019 年 12 月 20 日最終閲覧。
- 文部科学省 2008、「参考資料9 各専攻分野を通じて培う「学士力」——学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針」

- (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/siryo/attach/1335215.htm) 2019年12月20日最終閲覧。
- 文部科学省 2018、「資料1 学修の質保証の向上に関する取組について(制度・教育改革ワーキンググループ(第12回)配付資料)」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/1403144.htm) 2019年12月20日最終閲覧。
- 両角亜希子 2009、「学習行動と大学の個性」『IDE 現代の高等教育』515, 26-31頁。
- 中島ゆり 2017、「大学生の授業外学習時間の再検討」『長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要』8, 17-25頁。
- 中島ゆり 2019、「大学生はいつ学習しているのか」『長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要』10, 21-31頁。
- National Survey of Student Engagement (NSSE) 2019, “Summary Tables” (https://nsse.indiana.edu/html/summary_tables.cfm) 2019年12月20日最終閲覧。
- 谷村英洋, 金子元久 2009、「資料 学習時間の日米比較」『IDE 現代の高等教育』515, 61頁。
- University of Michigan-Flint “Surviving College” (https://www.umflint.edu/advising/surviving_college) 2019年12月20日最終閲覧。